

# 平成 23 年度第 1 回札幌文化芸術円卓会議の発言要旨

24.2.15 札幌文化芸術円卓会議事務局

## 1 各委員の自己紹介

### 【事務局】

平成 23 年度第 1 回札幌文化芸術円卓会議を開催する。始めに各委員から自己紹介をお願いしたい。

### 【漆委員】

私は今、札幌ではおとどけアートという事業をやらせてもらっており、札幌の小学校に芸術家と一緒に集いの場をつくる活動をしている。その他にも、北海道内の各地の小学校や商店街、地域を訪問して芸術文化活動をしている。道外でもそういった企画のコーディネートの仕事を行っている。

### 【井出委員】

札幌オペラスタジオの代表をしている。札幌のオペラの研修団体として 19 年前から活動しており、研修とともにアウトリーチ活動で小学校や老健施設、病院等で演奏をしている。6 年前からは教育文化会館で札幌オペラ祭を行っている。

### 【荒川委員】

札幌太鼓連合会の事務局長と札幌民謡連盟の役員をしている。主に演奏活動をしているが、道新文化センター等でも講師をしており、生涯活動のようなこともしている。

### 【浅野委員】

札幌市で写真の仕事をしながら「NPO 法人北海道を発信する写真家ネットワーク」という組織の事務局長をしている。札幌市の写真文化振興事業で、札幌市写真ライブラリーが廃止になった後の古い写真を整理し、皆さんに見ていただく事業などを行っている。個人的には東川町において、今年で 28 回目になる写真甲子園などで有名な東川町国際フォトフェスタの企画運営の仕事している。それと併せて、自分自身も写真家として活動を続けている。

### 【伏島委員】

私は、拓銀総合研究所というシンクタンクで、長い間、観光と文化の仕事をしてきた。古くは、札幌市の「芸術の村構想」というのがあり、その場所を決める段階から構想づくりのお手伝いをしたのが、札幌市との最初の関わりである。道庁の仕事としては、道立劇場の構想委員会から基本計画まで携わったが、結果として実現しなかった。しかし、それと付随して札幌だけが文化振興されてもどうにもならないので、全道が元気にならなければいけないということから、道庁に「地域創造アトリエ」という制度をつくってもらった。これは古くて良い建物を生かし、みんなが自由に使える文化施設をつくるという試みに道が補助する制度であり、全道で小樽、石狩、江別、栗山、恵庭、滝川、白老、帯広、釧路、札幌の10カ所にこの制度を利用した施設ができた。札幌は政令指定都市だから道の補助金が付きにくいのだが、私が委員長として必要と判断してできたのがシアターZOOである。ただし、札幌市だけではなく、全道のお世話をさせていただきたいという付帯条件を付けた。したがって、シアターZOOは、「地域創造アトリエ・ネットワーク（愛称「くらねっと」）」という全道のネットワークのお世話をしている。ちなみに、私は、北海道演劇財団の評議員としてボランティアをしている。

その後、十数年前だが、「アンビシャス札幌 21」という札幌の文化行政の構想作りをシンクタンクの間人として2年間お手伝いした。そのあと10年たって基本計画の作成委員会の委員として2年間お手伝いした。そのほか、指定管理者の選考委員のお手伝いなど札幌市との関わりは非常に長い。

このほか、仲間と語り合って、実のある仕事をしたいということで「北海道かるた」を5年間かけて作った。自分がもし社会の役に立ったとしたら、この仕事くらいだと思う。これからも札幌と北海道の文化をサポートしていきたい。

#### 【伊藤委員】

本職は映像・美術作家、仕事としては岩見沢の北海道教育大学で後進の指導にあたっている。どちらかというところ最近では自分自身の活動より、卒業生がアニメの産業や漫画の産業で活躍しているので、卒業生の七光りで世に出ることも多い。あまり力になれないかもしれないがよろしくお願ひしたい。

#### 【斎藤委員】

俳優、演出家という仕事をしている。札幌で25年間演劇を続けている。15年前に札幌市から文化奨励賞をいただいた。最近では東京で映像の仕事をする機会が多くなってしまったが、「円卓会議委員をやってくれ。」と言われ、断りようがないと思った。こういった会議には不慣れなのだが、去年の委員

の方が出したメッセージも一生懸命読んできたので、自分の現場から言える素直な感想を述べて、議論の邪魔をしないように頑張りたい。

#### 【田中委員】

生まれは東京だが、結婚して千葉に移った。3.11の地震によって液状化が発生して、8か月前に幕張メッセから札幌に移り住んだ。私は幼いころから破天荒な父親と芸事が好きな母親に育てられ、歌舞伎とか文楽とか新派、新劇、映画などあらゆる芸事が好きで、自分自身もバレエとかジャズダンスとかフラメンコとか、いろいろ主催してきた。観劇が好きで、1カ月に4回は見に行く。オペラや音楽も含めて、あらゆる文化芸術に関することが好きで、今回応募した。東京との比較も含めて意見が言えると思う。

札幌の中でも斎藤委員がいる劇団TPSが好きで何回か見に行っている。やはり良い演出家の方々がたくさんいるので、これから、基礎をしっかり身につけて、縦糸と横糸をしっかりと結び、いいものをたくさんつくっていいのではないか、という気持ちもあって参加した。

#### 【野田委員】

北海道大学文学部の3年生で、学部では芸術学講座に所属しており、大学構内に所蔵されている美術品の悉皆（しっかい）調査を行っている。サークルは美術部に所属している。学生なので未熟な点も多いが、自分なりの視点を持ち、この会議に参加したい。

#### 【本家委員】

趣味は美術鑑賞で、月一回くらいは、芸術の森や北海道近代美術館へ子供といっしょに出かけている。小学校では、家庭教育学級の学級長をつとめている。さきほど、漆委員からお話しのあった「おとどけアート」を子供の学校にも来ていただきたいと思っている。この会議で学んだことを、学校やいろいろな人たちに広めて行きたい。また、自分の得意分野以外のことも一緒に学んでいきたい。

#### 【事務局】

本日は、平成21、22年度の円卓会議の委員長を務めた佐々木前委員長にもご参加いただいている。

#### 【佐々木前委員長】

今は大学にいるが、この職業は4つ目で、旅行代理店、シンクタンク、博

物館の学芸員などをしてきた。大学では主に文化人類学と博物館学、学芸員実習を担当している。後ほど、昨年度の委員会で作成した報告書「平成 21/22 年度 文化芸術円卓会議からのメッセージ（以降、「報告書」という。）」について説明をさせていただく。

#### 【事務局】

次に、委員長と副委員長の選出を行う。特に御提案がなければ、委員長には伏島委員、副委員長には伊藤委員にお願いしたい（全委員の了解を確認）。

#### 【伏島委員長】

文化行政との関わりが長いが、基本的に遊ぶのが大好きなので、遊びの環境を良くするためにも芸術分野の環境作りや人材作り、施設づくり、それらをサポートする仕組みなど、一つでも二つでも前進できればと思って活動してきた。

去年、名古屋大学で文化経済学会の大会があった際に、佐々木前委員長が座長を勤められたのだが、芸術文化施設の運営について議論する会議があった。その際、仙台高専の方が、完成した施設がどう使われ、どう運営されているかについて克明に調査し、横浜の事例と比較検討して報告されていた。そういったことがまだ札幌では少ないと思っている。札幌だけで議論しないで、仙台に行ったり、いろいろ出かけ、知見を広げることが大切だと思う。

また、東京都写真美術館で、第4回恵比寿映像祭が開催されており、2006年に同美術館に収蔵された伊藤副委員長の作品（「Film Studies オデッサの階段」）も展示されている。このように、札幌には優秀なアーティストがたくさんいるが、そういう人たちと市民との関わり、あるいは企業の関わりがはたして十分かということ、意外と知らないこともあるので、その辺のことも視野に入れて議論を進めていきたい。

#### 【伊藤副委員長】

私は物を現場で作る方なので、会議で何かをまとめるのは苦手だが、伏島委員長がいるから大丈夫ということでお引き受けした。現場で見ているとしっかりとやっているはずなのに、全体で見ているとあまり有機的に物事が動いていない。あるいは多くの人が善意で動いているのに、かゆい所に手が届いていないことがある。私が皆さんと共有できるのはその部分だと思う。まとめる側としてはあまり役に立たないかもしれないが、どちらかということ作家、表現者、学生及び修行中の人たちを代表して議論ができれば良いと思う。

## 2 「平成 21/22 年度 文化芸術円卓会議からのメッセージ」についての解説 【伏島委員長】

本日は、佐々木前委員長にお越しいただいているので、前委員の方々が作成した「報告書」について説明していただき、それを踏まえて議論に入っていきたい。

### 【佐々木前委員長】

先ほど、伏島委員長がおっしゃっていた名古屋大学で行われた文化経済学会は私も非常に興味深かった。すごく良い発表だと思ったのは、仙台の「10-BOX（テンボックス）（注：公演・稽古など演劇活動の拠点施設）」と横浜の「急な坂スタジオ」（注：舞台芸術を中心とした幅広い芸術活動の創造拠点）で、お客さんの動きをトラッキング、つまり動物の動きを観察するように、お客さんがどういう動線で動いて、どこでどういう会話が発生しているかをとことんモニターし、それを比較して、その空間本来の役割を担っているのかいないのかを検証する実証的な研究だった。全国レベルではそれ位の検証まで文化施設において行われているという良い例だったと思う。

さて、「円卓会議のメッセージ」だが、市長にプレゼンしたのは、3.11 の午前中だった。午後震災があったことも含めて大変印象深いプレゼンだった。

円卓会議の、1 年目（平成 21 年度）は混迷した。色々な発言が出る中、どうまとめていくか苦勞した。そこで 2 年目（平成 22 年度）になって、建設的に進めるために SWOT 分析と呼ばれる手法を使い、札幌市が持っている文化芸術に関する弱みや強みについて分析を行い、一年目の議論の内容を枠にはめて整理してみようと考えた。その後、その分析結果をもとに委員を代表して 3 人のグループで集中的に議論し、報告書のたたき台を作成し、メール等で全委員にフィードバックしながら議論を進めた。

この「報告書」は、今回（平成 23、24 年度）の円卓会議の議論が進めやすいように前回（平成 21 年度、22 年度）の議論の成果を整理したという意味合いもある。これら全てを検証してもらうのではなく、この中からどれかをピックアップして、深めてもらえればよい。

報告書の、02 から 06 までは、今まで札幌市で考えてきた既存の枠組みを批判している部分で、枠組みのどこに課題があるのかを整理してみた。さらに 09 の次にある、「円卓会議が提案する新しい文化芸術施策の概観図」（以下「概観図」という。）には、それまで、会議の中で出されてきた、ポイント的なアイデアを既存の枠組みではない別の枠組みにはめてみたら、どこに位置付けられるのかについて書いてある。「概観図」で、より理想的と思う施策

の枠組みに、一度個別具体的なプロジェクト、活動の種類を落としてみた。

このように、全体として、「報告書」には個別のアイデアと枠組みの課題という二つの要素がある。

さらに、「概観図」に書かれている課題は予算の問題もあり、すぐにはアクションを起こせないが、意欲さえあれば、すぐにアクションを起こせるものがあることを、10に3点示した。

市長に報告したことは、大きく分けてふたつある。

ひとつは、06 既存の施策体系は総花的で機能していない。この枠組みではなく、09 の新しい「概観図」の枠組みでとらえたら、より効率的な文化政策が営めるのではないかということ。

2点目は、10にあるようなことを、どれかでもやってみてはどうかということである。

## 01 議論の前提条件

芸術とか文化は日常生活にとって大事。生きていくために必要ないということにはまったくならないことを、あらためて確認した。

## 02 札幌市における、文化芸術施策の経緯と問題点

昭和38年の市民憲章、平成9年に札幌市芸術文化基本構想「アンビシャス21」、平成19年に札幌市文化芸術振興条例、平成21年には札幌市文化芸術基本計画「花ひらく創造都市へ」ができています。

この基本計画では、4つの基本目標に35の事業が提言されているが、3分の1が継続事業であり、目標に向かってどの施策がお互いに関係しているのか、なかなか見えにくくなっていました。それで、総花的化しているというキーワードをつけた。この基本計画の冊子の12ページから4つの基本目標のもとに事業例が書いてある。ひとつひとつの事業は質が高く、それなりの成果がでています。ただお互いの関連性が見えてこない。1個1個それぞれが独立してあるように見えなくもない。それで、過去の施策事業の総括や検証のプロセスが抜けているのではないかと提案した。それともうひとつ、大きなトレンドとしては、2000年のバブル崩壊や少子化、なおかつ大震災などによって、社会的な価値観がどんどん変化していることがあげられる。それに、十分な対応が出来ていないのではないかと。02の下の方に赤で書いた部分、これが大きな課題ではないかと思った。

## 03 過去の施策の総括・検証について

私は大学でミュージアムの事業評価のことを研究しているので、あらゆる公立ミュージアムの評価のシステムや、自治体の評価システムの事例をたくさん見ている。札幌市の過去の施策の総括とか検証のシステムがどうかというと、確かに札幌市はしっかりやっていて、外部評価委員会も設けているが、芸術文化事業の単位からいうと、あまりに目が粗すぎて、検証した結果がフィードバックするようになっていようには、私には見えない。おまけに数字だけの議論が多くて、質については問うていないところが、この検証システムを文化にあてはめるのは難しいのではないかと思った。もちろん、市全体の施策をマクロで考えたときには、こういう評価・検証システムは機能していると思うが、こと文化や芸術に関しては、まだまだ足りないというか、目が粗いのではないかと考えている。

#### 04 社会的価値観の変化とは？

ここの解釈は、委員の中でもいろいろ分かれていたが、大きな価値観の変化としては、有形のバリューから無形のバリューへのシフトがあるのではないかと思う。つまり、バブル崩壊前は、お金、土地、地位とか有形なバリューを皆が追い求めていたと思う。それが崩壊して、どんどん人口が減っていく少子化のフェーズに入ってきたときには、今まで意識してこなかったがどこか心の奥底で感じていた、信頼とか、きずなとか、共感とか、無形のバリューの大切さに皆が気づいて、そちらにシフトしていると思う。特に震災以降はますますそれが加速していると思う。そんななかで、もしかすると札幌市のいろいろな文化政策の中で、施設重視、箱モノ重視ということがまだ残っていやしないか。また、旧来的なコミュニティ、例えば地域とか、地縁とかにとらわれすぎていて、志縁—それは、個人の意志によって離脱が自由なゆるやかな結びつきのタイプの繋がり方ということだが—、志縁によるコミュニティへのゆるやかな移行において、文化芸術は大きな役割を果たすということに、まだ注目されていないのではないかとということも指摘した。

有形バリュー重視から無形バリュー重視に人々の意識が変わってきているときに、本当に芸術文化の活動や施策がそちらにシフトし切れているのか疑問ではないかと指摘した。ある意味、有形バリューは個人が所有して個人で使うのが基本だと思うが、無形バリューは、共有化し、シェアし合うという点で、多分まったく接し方が違ってくると思う。こういうところに留意されているのかということも委員の中で意見が出ていた。

#### 06 今までの文化芸術施策の概観図

「基本計画」の一番中央に、「市民が心豊かに暮らせる文化の薫り高き札幌のまちづくりを目指す」ということで、「育てる」、「つなぐ」、「発信する」、「継承し、活かす」ということが掲げられている。もちろんこの方向は、それぞれ間違いではないのだが、各施策・事業が評価がされていないということは、少なくとも一回止めてリニューアルするということもなかなかしづらくて、とにかくどんどん施策や事業の数は増えて行っている。しかしお互いの関連性もなかなか分からなければ、評価のシステムがしっかりしていないので、それによる成果も分かりにくくなっているのではないか。

## 07 新しい概観図のコンセプト

06 の枠組みでは、誰が行うのかという主語が見えにくかったと思う。それで新たな枠組みで整理したらどうか。市民、アーティスト、行政という3者の役割をまず明確にしていこうと考えた。

市民（企業を含む）は、コミュニティ（札幌市）の主体として文化的生活を営む、文化芸術の享受・支援者として機能している。アーティストは、新しい価値を創造し、コミュニティに提供する。文化芸術の発信者として機能している。行政は、コミュニティの文化的な成長の指針を構築し、維持し、文化芸術の環境整備者として機能している。こういう位置づけで3者がお互いに補完しあいながら、関係を持ち合うという図だと分かりやすいのではないかと考えた。

## 08 キーワード

真中にキーワードを置こうということで、「芸術の産業化」というキーワードを置いた。これは多分、誤解を生む言葉で、あまりよい言葉ではないと思う。ただ、インパクトをつけたかったので、あえて産業化と言ったが、芸術で儲けましようと言っているのでは全く無い。

産業、つまり経済行為というのは基本的に価値を交換するということである。例えば商品とお金の交換は、物を買うときに普通に行っていることだが、目に見えない価値の交換ということも当然あり得る。ここで言っている産業化とは、もう少し平たく言うと、芸術と言うフィールドの中でうまく価値を交換し合いましよう、3者間で交換し合いましようという意味だと思っていただければよい。ただ、そのように言うとすごく面倒くさいので、私たちは、あえて産業化という言葉を使った。決してお金を儲けましようという意味ではない。もちろん、副産物としてアーティストがうるおい、都市がうるおうことを否定するものではないが、それが最初に立つ



ものではない。

このように、3者を「産業化」というキーワードでとらえることによって、3者に芸術の担い手としての自覚も生まれるのではないか、お互いに補完し合う関係にあることを意識して、緊張感も生まれるのではないか、芸術文化が社会の共通財産として定着することもあるのではないかと考えた。

## 09 「芸術の産業化」によって期待される効果

今言ったように、市民、行政、アーティストそれぞれが期待される効果を整理してある。

この3者の担い手以外に、コミュニティとしての札幌市自体にも、イメージアップ、市としてのブランド力が高まるなどさまざまな効果が当然期待されると思う。

### 円卓会議が提案する新しい文化芸術施策の概観図

こういう枠組みの話は、逆に言うと、1年間の議論によって出てきたアイデアを入れるのにふさわしい枠組みを後からつくったとも言えるのだが、その一番大本となったのが、「概観図」だった。この図はそんなにうまく整理されていない部分もあるのではないかと思う。例えば行政の括りの中に置いた、「〇文化政策立案グループの立ち上げ」だが、今までのような立ち上げ方をわれわれは望んでいるのではなく、そこに市民がもっと入ったり、アーティストも入るようなことをイメージしているので、もしかすると、行政の枠よりも、市民と行政の中間部分に置いた方が良いのかもしれない。このように、主に行政が主体的に動くものと、市民と行政、両者が協議しながら決めるものということで、間に置いたものもある。例えば、上から三つめ「〇条例の改正（ホール使用の時間制限など）」だが、実際、アーティスト、もしくは利用する市民の側からすれば、まだまだ時間的な制約が厳しくて不自由な面が多いと思うが、これは両者が議論しながら検討するとしても、最終的に条例を改正できるのは行政しかないので、どちらかという、行政の枠の中に入っても良い要素なのかもしれない。ここに出ている具体的な項目は、それぞれ9名の委員が、最初の一年間でこういうのも出来たらよい、ここが課題だと言われたのを、3者の枠組みの中に入れ込んでみたものである。

ただし、個々の項目については、あえて深く議論してはいない。例えば、市民の枠の中に置いた、「大学院レベルのアートマネジメント専科など、養成機関を創設する。」という項目だが、これは実は多くの委員がやってみたいねと言っていたことだが、ここだけ深く議論して提案しても、ピントがずれた

提言になってしまうと考えた。このように、ヘッドラインを並べただけである。今回の円卓会議では、例えばこれらの中から複数の要素を取り出し、もし札幌市としてそれを推進するのであれば、どのようなロードマップがあるのかとか、どのような組織体があれば一歩も二歩も進むことができるのかとか、そのような具体的な議論を来年3月へ向けてやることも選択肢の一つだと思う。そのような意味で、この概観図はつくってみた。

## 10 最後に～すぐにでも始めるべき施策の提案

具体的な提案として3つ書いた。ひとつは、(2)文化芸術に関するあらゆるデータを蓄積し、データベースとして提供できるようにする、ということである。ファクトベースでとらえて政策に活かすということは、どの政令市でも普通に行っていることだと思う。特に横浜市では、「市民生活白書」の中で、横浜市の市民象を所得、性別、職業とかではなくて、8つのクラスターに分けて、もっと複雑なクラスター分析を行っている。ライフスタイルとか価値観を中心にしたグループ分けをして、それぞれの市民象のグループにはどういう施策を打っていくのかというような行政を行っている。それはまさにデータがしっかりしているから出来ることだと思う。そのためには基礎となる一次データがなければならぬといけないので、文化芸術に関して、少しでもそのようなデータを蓄積してはどうかという提案だ。

(3)では、観光文化情報ステーションを、もっと主要駅に設置するとともに、ホームページを充実させていくことを提案した。これは、比較的簡単にできることではないかなと思っている。(2)や(3)を行政だけで行ってしまうと、既存の枠組みの中にとらわれてしまうことがあるので、できれば、このようなことを行うに当たって、市の職員と民間の専門家やもしくは大学などと連携しながら行えば良いのではないかというのが、(1)に書いてあること。今東京でも、大阪でも橋下市長が、アーツカウンシルを立ち上げますというようなことを言っているが、行政から支援を受けた専門の民間機構が文化を担っていくという動きは、いろいろなところで出てきているので、そういうことを札幌でも検討してはどうかというのが、(1)の要旨である。

## 3 意見交換

【伏島委員長】

前回の会議は、すごいことをされたと思う。私は、どちらかというとA41

枚で結論を差し上げて、それを説明するものを後ろにつけておくというビジネススタイルで、ずっと行ってきた。これだけ丁寧な中味のある仕事を引き継いで、これからやれるかどうか自信がないのだが、しっかり踏まえてやっていきたい。

【佐々木前委員長】

ひとつ大事なことを言い忘れた。この報告書には、事実関係の訂正以外、事務局の手が全く入っていない。自分たちの手で報告書を作成し、市長へ直接話ができる、こんなに自由な会議は多分他にないだろう。このような円卓会議の趣旨にのっとり、向き不向きなど関係なく、皆さんに意見を出してもらうことが大事だと思う。

【漆委員】

この円卓会議の目的は、最終的に市長に提言をすることがゴールなのか。それとも、何かをまとめるというのが前提にあって、手続き上、市長に提案するのが目的とされるのか、単純に皆で話し合いを重ねていくということ自体が大事だというものなのか。

【佐々木前委員長】

前回は出来るだけ自分たちで報告書を書こうとした。自分たちの声を届けたいということに、最初の段階で皆が一致したので、報告書をつくる作業も自分たちで引き受けた。しかしそれも選択なので、話し合いの議事録を事務局でつくってもらって、それを直しながらやるということもあると思う。今回も最終的なゴールは市長への提言（報告）ということではないか。

【伏島委員長】

それは大事なこと。皆で自由に協議をしてそれを自分たちでまとめ、市長に投げかけることが前回も行われていた。今回も、この自由度は担保されていると考えているが、それで良いか。

【事務局】

そのようにお願いしたい。

前回は会議を8回開催した。我々は基本計画に書かれた事業はほとんどやっている。また、日々仕事に埋もれているので、全体像を改めて引いて見ることがなかなかできない。円卓会議は、皆さんの意見を聞き、「こういう視点もあるのか。」と刺激を受ける貴重な場でもある。皆様方にとっても、日々の

活動の中で違う分野の方と意見交換することで、刺激し合う場になる。市長への報告書のまとめ方は皆さんの意思に委ねる。A4ペーパー1枚ということもあるだろうし、平成21、22年度のような報告書もあり得る。

#### 【伏島委員長】

事務局ベースで進めるのではなく、自由にテーマを決めて議論し、それをきちんとしたペーパーにする。その形についても皆さんの自由が担保されているということが確認できた。そして、ありがたいことに佐々木前委員長たちが大変な苦勞をされて、土台をつくってくれた。だから、今さら「文化とは何か。」といった議論はする必要が無い。こういったことを踏まえて皆さんで議論を進めていきたい。

#### 【伊藤副委員長】

「報告書」を読んで全くその通りと思うことが多かった。特に質の話。ほとんどの場合は質を監視し、どう上げていくかという議論が余りされない。このメッセージを読んでみて、各事業の関連性がとても難しいということ、その結果、総花的という以上に、総論は正しいが、あまりうまく機能してないことが多いという印象を受けた。

そこで、円卓会議の意義に話を戻すと、市長への提言、提案をしたいから議論するのと、ここで議論した内容の使い道が、例えば、文化部の内部の資料として使われるかということによってだいぶ違うと思う。例えば、「育てる」といったことや「つなぐ」ということに対して個々の事例があるが、教育委員会の話が入っていない。つまり、いくらアウトリーチを増やしても、あるいは美術館を整備しても、教育委員会や教職員組合が学校教育のプログラムの中に観劇や演劇をトップダウンで入れるような方向がなければ浸透しない。あるいは、各駅にステーションをつくっても結局は人を付けられない以上、いくら文化部が頑張っても、その受け皿になるような、例えば、その設備を持っている交通局はどう思っているのか、という話になる。これがクリアにならないと結局パンフレットを置く棚が増えるだけになる気がする。その時に、市長への提言であれば、ある種のトップダウン的な意味も含めて意味がある。文化部内の資料として使うとなると、またちょっと違ってくる。

「報告書」の最後のページに施策の提案があるが、内容的には賛成だが、これが市長への提言であっても部内の資料だとしても、すぐにでも始めるべき施策がこの1年間の中でどれだけ実現されているのか。つまり、この資料が実際にどのように使われているのか確認したい。

【事務局】

「データベースを作る。」ということに関して、文化部においてアンケート調査を行った。

【伏島委員長】

この報告書の中身にある施策について、円卓会議の自由意思なのか。文化部と調整し、文化部の意思も反映したものとなっているのか。

【事務局】

特に調整は行っていない。市長へは、提案というよりも活動報告という形である。つまり、会議の結果は行政ばかりに向いているものではなく、おそらくアーティストの方々や市民、企業など各分野の人々へのメッセージでもあると解釈している。そのなかで、報告書の 10 は行政がまず最初にすべきこととして、ご指摘いただいたと解釈している。観光文化情報ステーションを地下鉄の主要 18 駅に整備することは、非常にハードルが高い。大通りの観光文化情報ステーションには人を配置して、情報を収集している。平成 25 年度を目途に、さらに充実するために動き出しているところである。

残りの 17 の駅について、情報の発信の仕方について、交通局と連携することも可能である。交通局もメトロギャラリーという地域の作品を展示する事業に取り組んでいる。文化部も交通局と組み、今年度、500m美術館を実現させた。交通局と情報の発信の仕方にはどのようなものがあるのかを考えながらやっている。少しずつでも情報交換を行っている。教育との関係についてもハロミュージアムやキタラファーストコンサート、劇団四季の心の劇場などいろいろ取り組んでいる。

【伏島委員長】

すべてを行政が整備することだというように固まってしまうと、議論が浅くなる。例えば民間企業にボランティア的にやっていただく方法もあるのではないか。色々な形があってもよい。

【斎藤委員】

ホームページで平成 21、22 年度委員の発言内容を見てきたが、よくこの報告書にまとめたと思う。その中で、ちょっと問題だと思ったのは、演劇関係でいえば、演劇振興と言いつつもやはり経済のことが先に出てしまっている。それは必要なことなのだが、それもありつつ、表現の中身のことを考えたい。先ほど、質のことをおっしゃったが、私は演劇担当なので現代劇の

ことをいうと、まだまだレベルが低いと思っている。それが産業化に直接つながってこない理由もある。もっとレベルを上げていくにはどうしたらいいか。そうすると、誰が質のレベルの高い低いを判断するのかということにもなるが、やはりレベルが高ければ、観客が増えるとか、お金、人が動くとか、結果が出てくるはずである。ただ、札幌市は今、すごくレベルが上がってきている。私が 20 年前にやっていた時に比べて、ずっとレベルが上がって動きも活発になっているので、今の状況は悲観的ではない。もっと若い人に世界を知ってもらいたい。ここを踏まえて、もうちょっとユニークにしたい。これはメッセージで政策提言ではないのだから、もうちょっとユニークで札幌ならではの何かということを、この「報告書」を踏まえて考えた方が良いかなという感想を持っている。

#### 【田中委員】

演劇がすごく好きな者として言わせてもらおうと、質のレベルアップが大切だと思う。それは演劇だけじゃなくて音楽もそうである。他と比較したときにすごいと思えるような非日常が活性を導くと思う。やはりワクワクさせないとだめ。もしかしたら、弱点だと思っていたことが案外弱点では無かったり、北海道の人たちが普通だと思っていることが、他からすると普通じゃなかったりする。そういう視点が大事だと思う。私としては自由なテーマを決めて質の問題を議論したいと思う。

#### 【野田委員】

報告書の 07 に、市民、行政、アーティストの 3 つ役割の明確化があるが、3 者の説明書きの部分は、今後このような機能を持つことを目指すということだったのか。最初に報告書を読んだときは、自分が該当するとすれば市民だからそれが一番気になった。享受、支援者として機能するというのは、自覚的にそのように働いていくということか、「私たちは芸術を支えていく存在なのだ。」というように。

#### 【佐々木前委員長】

これは順番が大事で、文化的な生活を営むということが一番の役割。ただ、それだけではなく、当然一市民として社会で行われている芸術文化を支えるのだという意識も、二番目として必要ではないかということ。ステークホルダー（利害関係者）が 3 者しかないとすれば、その役割を明確にするためにかなり観念的に考えて整理したので、こうあるべきだというよりは、この三者で切るところなるというイメージ。

#### 【伏島委員】

今の議論も重要で、社会がこれだけ変わっている。格差の議論もある。文化的生活を十分に営めない市民がいる。それにどう対応するかという議論もこれから必要になる。

#### 【本家委員】

資料を事前に読ませてもらったが、やることが多すぎて、どれからやればいいかが見えない。次回の会議以降はどのように進めるべきか。例えば、一つのテーマを絞って全員で議論するのか、演劇や美術について、3~4人のグループに分かれて話し合うべきか。何を質問していいのか、何から議論していけばいいのか、始めていけばいいのかわからない。個人的には「アート教育プロジェクト」や「アーティストインレジデンス」の制度について興味がある。これからは、芸術のイベントを雪まつりやよさこいのレベルのイベントにできれば良いと思う。

#### 【漆委員】

せっかく「報告書」があるのだから、今後の展開としてやらなければいけないのは、「報告書」をどうするかということ。ひとまず置いておいて、新しいことに取り組むのか、「報告書」をどのように生かしていくのか、ということについて一度議論するべきである。意識調査を行ったり、アーティストのデータベースをつくるという話も聞いており、少しずつ動いている部分もある。文化政策立案グループというのが立ち上がっているのかどうかはわからないが、例えば「報告書」により既に動いているものがあるのであれば、それはそれで進めていただく必要があるのだろうし、それを妨げるようなことを今回議論していてもしょうがない。テーマを決めるのだとしたら、この「報告書」の項目に盛り込まれている事柄のどれかに絞って前進させることでも良い。

一つだけ提案というか、要望がある。私は市民とアーティストの間に入るコーディネーターの仕事をしている。市民とアーティストの間に入って活動している。いわゆるアートマネジメントの分野だと思っている。そういう役割を担う人間をもっと増やしていく必要があるのではないか、その質を上げていくという問題意識が常にある、自分も含めて成長したいと思っている。アーティストが直接やり取りするのは難しいだろうし、市民と直接やることも難しいとなった時に、「いったい成立するのか。」と疑問に思う。なので、このことについて会議の中でいつか議論できれば、ぜひ勉強させてもら

いたいと思っている

【伏島委員長】

コーディネーターの質については、すごく重要なことなので、どこかで議論になるのではないかと思う。

【井出委員】

斎藤委員がおっしゃったように、本当に 20 年前に比べて今の演劇界は成長されたと思う。先日、最前列で演劇を見させてもらい、大声をあげて笑って楽しませてもらった。

しかし、「文化芸術意識調査報告書」を見せてもらって、オペラに関する調査内容を見てショックを受けた。オペラをやるものとして真摯に受け止めて質の向上をしていかなければいけないと考えている。オペラの世界も紆余曲折しているが、芸術文化財団のオペラ祭が始まったり、キタラオペラが始まったり、サンプラザオペラが始まったり、色々なホールがオペラを応援してくれる状況になってきているので、いかにして、オペラに携わるわたしたちが質を向上させるのかということを考えている。そういった点で、漆委員がおっしゃったとおり、アートマネジメントの分野でも質の向上が必要なのだと感じる。これから一年間、色々感じてきたことを皆さんに伝えて、色々なことを教えてもらい、勉強し、それを良い意味で吸い上げてもらって、それが札幌の文化につながって行けばと思う。

【伏島委員長】

質の向上は、マーケティングと関係が深いと思う。例えば、オペラ祭のときに魔笛をすごく短くして行った。新国立劇場がまた別の形で魔笛を行っている。すごい実験だと思う。それによって、マーケットが拡大することも十分あり得る。短くしたからダメなのではなくて、短くしたからこそ興味を持ってマーケットが育つ。そのような現場の話をして欲しい。

【井出委員】

今回は公演をする前にアウトリーチで各小学校をまわった。それにより子供達がたくさん来てくれて 3 回公演が満席になった。セットを簡略化しても小学校を回るなどの工夫はしている。

【荒川委員】

各委員から質をあげるという意見があったが、質をあげても、演劇を好き



な人は演劇を見に行くし、アートが好き人はアートを見に行く。この調査結果をみてショックだった。意識をあげないことには、興味の無い人は、データベースを良くしても、そのデータベースを見ないかもしれない。観光文化情報ステーションを増やしたからといって、そこにパンフレットを取りに行ったり、話を聞きに行ったりする人はあまりいないかもしれない。興味のある人は調べたりするが、意識を上げないと興味を持つ人は少ないと思う。いかに意識をあげていくか、このような調査を行ったのだから、これをもとに総括、検証していかないといけない。報告書の 02 に「過去の施策について十分な総括、検証ができていない。」という反省点があるわけだから、ぜひとも、この会議の中で検証、総括をして、質をあげることも大事だが、同時に意識を上げることも並行してやっていかないと、芸術文化は発展していかない。ぜひとも、議論して欲しい。

#### 【浅野委員】

この報告書の中で特に思ったのは、市民のところ。市民の文化芸術の享受、支援者としての機能が、芸術の産業化という言葉につながっていくと思うが、市民には、鑑賞者でもあり支援者としての役割もある。この支援者としての役割の部分に、鍵としての何かがかけていると思う。例えば、私は写真の分野だが、演劇や音楽は必ずチケットという形でお金を払う仕組みがあるが、写真や映像、絵画については、お金をとらないでアーティストが自腹で展示等を行い、その成果として作品を買ってくれる場合があれば、それが援助になる。なかなか、北海道においてそういった部分は少ないということを感じる。先ほど、意識という問題の指摘があったが、そういった市民が支えていくといった意識をどう考えていくか、また、市民の方にそういった部分をどうアピールしていくのかというのが重要だと思う。それが芸術自体を活性化していくことになっていく。海外と交流していくにも、そういった部分がないと海外から人を呼ぶことができない。質をあげる意味でもそういった部分を養成していくことが大事である。

もう一点、私が今関わっている写真の町東川町での経験から、行政だけが単独で動くと「箱モノ行政だ。どうせ金をかけるならもっと役に立つ保育所を作れ、学校をつくれ。」と言われてしまう。逆に、アーティストからも「お役所仕事だ」と不満が出てしまう。そこをどうやって皆で意見を出しながら調整していくかということ。今回は、演劇の方、音楽の方、オペラの方、写真家がいる。ここに参画していない例えば、書だとか、ダンスなど色々な分野の人の意見を聞いてつくっていかなければならない。特定のジャンルだけが突出するようなことにならないように、全体が上がっていくようなシステ

ムをつくっていく必要がある。

【佐々木前委員長】

この報告書は反面教師として使う事もできる。否定しても全くかまわない。とにかく何か鏡になるものがあることが大事である。これを継承してどこかを深めてもらうのもいいし、これを否定して新たな枠組みをつくるのもよしだと思う。